

大学入学共通テストについて ——日本史

吉野 領剛

➤ れまでのセンター試験が、すでに「知識問題とともに思考・判断を重視した設
問をバランスよく出題していた」という認識を、ほとんどの日本史教員がもっているのではないだろうか。一方、2017・18年に実施された試行調査問題はあまりにも力作で、これだけ史・資料をふんだんに使った作問をいつまで続けられるだろうか、と私は心配したものである。

予想通り、2021年1月16日(第1日程)に実施された大学入学共通テストの日本史Bの形式は従前のセンター試験の出題に近かったが、思考力や判断力を問う姿勢はいっそう鮮明になっていた。大問数はセンター試験と同じ6題だが、マーク数は4個減少の32個。それでも時間が足りなかった受験生が多かったようで、設問文の読解力や情報処理速度の重要性がうかがえた。

本稿の主目的は、共通テストの問題分析ではない。高校生の学習の過程や発表など、教員からの一方的な知識伝達ではない授業風景が設問文に描き出されたように、共通テストは我々教員にも変革を求めている。限られた紙幅のなかではあるが、共通テストの設問を受けて、学校現場でどのような取り組みができるか考えてみたい。

史・資料の活用と授業のあり方

一昔前に比べて教科書がカラフルになり、また各社が工夫を凝らして資料集を製作するなか、現在の日本史の授業における史・資料の活用はすっかり定着しているといえよう。

本テストではグラフの読み取り問題が2題出題されたが、4「小判の重量と金の成分比率」、31「経営規模別農家戸数と兼業農家の戸数の割合」はともに教科書『詳説日本史 改訂版』(日B309)掲載資料の見た目を変えたものである。また、13「紀伊国那賀郡神野真国荘絵図」は初見資料であろうが、『詳説日本史』p.80に掲載の「神護寺領紀伊国杵田荘絵図」で荘園村落について学習していれば、聞かれている内容は既習事項である。つまり、教科書を使った基本的な知識を身につけさせる授業が、共通テストの対策といえる。

しかし、史・資料を使った授業を実践していても、結論を「教員が説明」してしま

っていないだろうか。史・資料を提示して「生徒に考えさせ、(話し合わせ、)説明させる」、あるいは史・資料を使った「問題演習に取り組ませる」といったプロセスを通さないと、テスト本番で、見慣れない史・資料を前にひるんでしまう。結論を急がない姿勢で、授業を組み立てたいものだ。

史・資料の読み取りに目が行きがちだが、を解くには大名の種別や井伊直弼の藩名・事績についての知識が必要である。また、は中国諸王朝の領域が示された地図を年代順に配列させる設問だったが(本校受験生の正答率がもっとも低かった設問)、こうした新しい形式をふまえ、世界史的な観点・知識も身につさせねばならない。

思考力・判断力を育む機会をつくり、かつ知識・理解の集積をはかる。そのようなことが限られた授業内でできるのか。そのヒントが、本テストで提示された「テーマ発表」「博物館学習」「図書館の活用」である。授業はあくまで彼らが「学びに向かう」ための時間であり、日本史への興味・関心を高められれば、彼らの自学によって知識も増え、思考力・判断力も身につくはずである。多分に理想論的であるが、めざす道としては間違っていないだろう。

思考力・判断力をはかる作問

高校の日本史の定期考査の多くは、50分程度の時間で、狭い出題範囲のなかでおこなわれる。長い試験時間に少ない「ネタ」という前提条件を考えれば、また、基本的な歴史用語の蓄積の有無の確認も必要であるから、いわゆる「虫食いリード文の穴埋め問題」が多くなるのはいたしかたないのかもしれない。しかし、それが生徒から「日本史は暗記モノ」とみられてしまう一大要因になっている。狭い出題範囲のなかにあっても、1題でも2題でも「思考力・判断力」を問えないか。の設問から考えてみよう。

「X 国家は、自ら鑄造した錢貨しか流通を認めなかった」と関連する法令として、「a 運脚らは錢貨を持参して、道中の食料を購入しなさい」「b 私に錢貨を鑄造する人は死刑とする」のどちらかを選ぶ。a・bともに『詳説日本史』に直接的な記載はないので悩むところだが、設問内の「咲也さんのメモ」を読んで、京・畿内の外では物々交換がおこなわれていたという『詳説日本史』p.47の内容を想起すれば、「道中で食料を購入できないだろう」ことに気がつくことができる。すなわち、aが誤答だ。上記メモにある「古代には、米や布・絹なども貨幣として通用している」を読み飛ばさない読解力、またそれをヒントとして受け止められる知識・理解があって、はじめて思考・判断の段階となる。

このような丸暗記だけでは対応できない選択肢を含んだ問題を、多忙な高校教員が「開発」することは難しい。それでも、多くの大学入試問題に触れることは、そうした良問を「発見」する機会となるだろう。私自身は過去の大学入試問題に加え、「高等学校卒業程度認定試験(旧大学入学資格検定)」から多くの示唆を得て、作問だけでなく、授業時のアイズブレイクにも活用している。文部科学省のサイトに過去問題が掲載されているので、興味のある方はぜひご覧になるとよいだろう。

おわりに

2021年1月18日付『日本経済新聞』によれば、大学入試センターの担当者は「教科書の知識でそのまま答えられる問題は避けた」と述べたという。つまり、教科書の知識が「別のかたち」で出題されて「思考力・判断力」が試されるとしても、その土台として「教科書の知識」の修得は必要なのである。

「どのように学ぶか」をふまえた場面設定、思考力・判断力を試す多くの作問。今回の共通テストは、実にメッセージ性の強いテストである。授業という限られた時間のなかで「体系的知識の形成」をどのようにはかるか、思春期の彼らがノッてくるような「考える場面」をどのようにつくるか、そんなことを考える大きな契機となった。

この原稿を執筆しているのは1月下旬であるが、新テスト実施直前までの「迷走」、そして新型コロナウイルスの流行という未曾有の危機を乗り越え、これからの私大・国公立2次試験にのぞむ受験生へエールを送りたい。

(よしの・むねたか／東京都立西高等学校教諭)